

# KYOKY

129

特集

まなびの森にきませんか？

——私たちの大学ミュージアムを紹介します



京都教育大学

<表紙>

『金魚』

附属高等学校 2年 岡口美沙

私は昔、金魚を飼っていました。今はもうないけれども、水草の緑の隙間から、赤い金魚がゆらゆらと出てくる姿は忘れられません。今回は、そんな姿を油絵で描いてみました。

<裏表紙>

『バルセロナ』

附属高等学校 2年 宮原ななせ

スペインの旧市街（ゴシック地区）の光と影の強いコントラストに惹かれて描きました。油絵で、色同士の境目をはっきりさせるのに苦労しましたが、最終的に自分の納得のいく絵になったので良かったです。



# CONTENTS



- <表紙> 附属高等学校 2年 岡口 美沙  
<裏表紙> 附属高等学校 2年 宮原 ななせ

## 特集

- 2 まなびの森にきませんか？  
——私たちの大学ミュージアムを  
紹介します  
教育資料館長  
太田 耕人（文責）

## 海外見聞録

- 8 台湾との教育研究交流四半世紀  
発達障害学科教授  
田中 道治

## 留学生の声

- 10 日本、ありがとう！  
教育学研究科理科教育専修  
Kek Lay See  
ケック・レイシー  
（マレーシア出身）

## 研究余滴

- 12 料理の文法!?  
国文学科教授  
森山 卓郎

## 京教学内探訪

- 14 京都教育大学の樹木について  
美術科教授  
岩村 伸一

## 附属学校園だより

- 16 私の名前・物の名前  
—幼稚園生活の片づけに着目すると—  
附属幼稚園副園長  
鍋島 恵美
- 17 「教育実践研究発表会」  
附属桃山小学校副校長  
西井 薫
- 18 附属桃山中学校職場体験学習  
～135名の生徒が40事業所で  
お世話になりました～  
附属桃山中学校副校長  
高木 英男

## 新任の先生から

- 19 大学院連合教職実践研究科教授  
竺沙 知章
- 19 大学院連合教職実践研究科教授  
小松 茂
- 20 教育支援センター准教授  
竹花 裕子

## 卒業生の声

- 21 「人間先生」  
福山市立千年中学校 教諭  
内田 祐衣
- 21 子どもたちの明日のために  
京丹後市立網野南小学校 教諭  
山形 志織

## ようこそ大先輩

- 22 「夢・ファイト・誠意」のすすめ  
京都教育大学同窓会事務局員  
谷口 博志

## 読者の皆さまへ・編集後記

- 23 地域連携・広報委員会委員長  
細川 友秀

# まなびの森にきませんか？ ——私たちの大学ミュージアムを紹介します

教育資料館長 太田 耕人 (文責)



## さあ、まなびの森へ

石畳を踏み、いま大学の南門を入ったとしましょう。あなたの右手に、ゆるやかな坂道が講堂の傍らを抜け、木立のなかへ続いています。その小径をたどってみませんか？やがて右奥に、クリーム色の壁にテラコッタ色の破風をいただいた洋風建築が、木の間隠れにみえてきます。建物の手前を南側に廻れば、タラヨウの樹の緑陰の下、瀟洒な正面玄関に出ます。

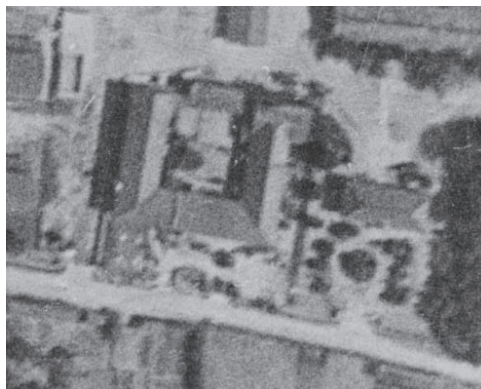
ようこそ、「まなびの森ミュージアム」へ。

館内をご案内する前に、まず建物の歴史についてお話することにしましょう。この建物は115年前、1897年（明治30年）に陸軍第19旅団司令部として建てられました。その後、駐留する部隊が入れ替わり、終戦時には京都地区司令部として使われていました。

米軍が1946年（昭和21年）に撮った空中写真に、この旧司令部の建物がみえます。写真右下に樹木でかたどられた円形の手寄せがあり、道路に面した塀が途

切れて、門になっています。司令官は自動車や軍馬で、この門から司令部に乗りつけたのでしょ。ミュージアムの玄関前はいまも、小さなロータリーになっていて、往時のなごりを留めています。

戦後しばらく米海兵隊の「キャンプ・フィッシャー」となっていた、かつての陸軍施設の跡地に、1957年（昭和32年）、本学の前身、京都学芸大学が移転してきました。新築の建物だけでなく、米軍が改装した旧陸軍の古い建物も役立てることになり、司令部だっ



たこの建物は、学長室として用いられることになりました（ちなみに、いまの講堂の辺りに事務棟が置かれていました）。

学長室が別棟に移ったあと、旧司令部は職員会館などに使われていましたが、2010年（平成22年）、思い切った改修をおこないました。金沢城公園に残る第6旅団司令部を参考に、可能なかぎり創建当時のすがたに復元したのです。旧陸軍の建物を戦争遺跡として保存することで、「軍都」であった伏見の歴史を伝え、平和の尊さに思いを巡らすよすがになれば、と思っています。今年1月には、京都市民が京都の財産として残したいと思う、「京都を彩る建物や庭園」に選定されました。

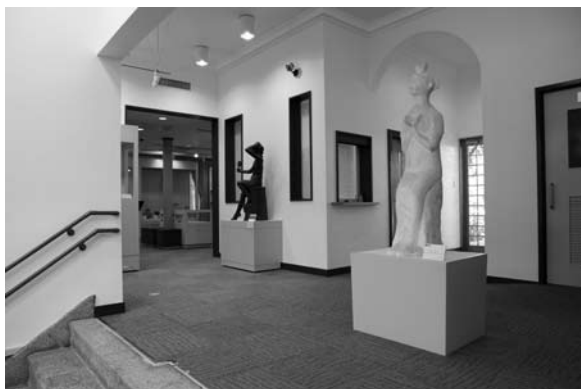
ミュージアムは入場無料。開館は隔日で、月・水・金の13:30～17:00のため、それ以外の時間帯はお入りいただけませんが、ぜひこの建物の外観だけでもご覧ください。と思います。

## 展示室へ

では、ミュージアムのなかへご案内しましょう。玄関を入ると、創建当時の古い石の階段がロビーへ続いています。じつは復元前は、玄関部分は閉鎖されて壁になっており、石段の上にはロビーと同じ高さの床が張られていました。

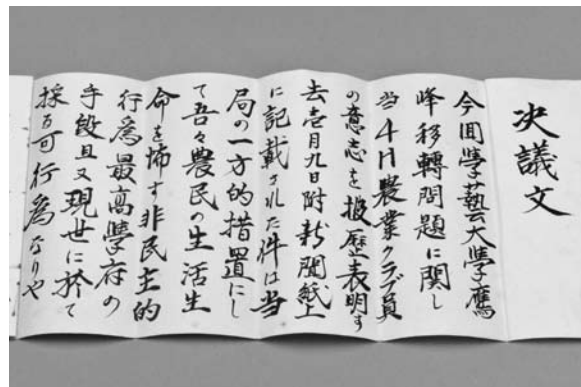
ロビーの天井も、創建当時の天井があらわれたのを修復しました。高い天井にアーチ型の部分があり、当時の洋風建築への嗜好がうかがわれます。ロビーから左右に展示室が分かれます。西側には、岩石や化石、生物標本や剥製、世界の楽器、藩札や考古学上の発掘品などがあり、彫刻、書などの美術品も展示されています。東側には、理化学実験器具、足踏み式オルガン、そして本学の歴史を物語る原資料などが陳列されています。「明治時代、理科の授業ではどんな実験器具を使っていたのだろうか？」たとえばそんな疑問を持たれたとき、私たちのミュージアムにきていただければ、実物をご覧くださいことができます。

本学の前身、京都学芸大学がいまの地に移転してき



たことは、先に述べましたが、じつは移転が決定するまでには、たいへんな苦労がありました。本学の歴史を紹介するコーナーには、それにまつわる資料が並んでいます。鷹峯移転に反対する鷹峯4H農業クラブが送ってきた1955年（昭和30年）の決議文（写真）の横には、当時の山内得立学長が心労のため胃潰瘍で倒れたことを伝える新聞記事が展示されています。小山地区、桃山地区に分かれていた校地を一つにまとめるため、移転は急務でしたが、鷹峯地区、桃山地区（府立桃山高校付近）、長岡競馬場、比叡山山麓など、いずれの候補地も決着せず、計画は迷走しました。現在の藤森キャンパスも、航空自衛隊幹部候補生の学校が建ちそうになったところを、懸命に運動をして確保した校地でした。

収蔵品については、後ほどもう少し詳しくご紹介しようと思います。



## ミュージアム設立にいたるまで

まなびの森ミュージアム誕生の発端は、2008年（平成18年）から順次おこなわれた校舎の耐震改修でした。改修工事をするためには研究室を移転せねばなりません。引越しのための整理をしていると、理学科工作室などから古い教材、教具が次々と見つかりました——エジプトのミイラの一部、動植物や岩石の標本、約200点の理化学実験器具などなど。

埃をかぶった汚いガラクタと思えたものが、小林宣之・附属図書館事務長（当時）が磨き上げると、アンティークさながら、堆積した時間を感じさせる光を放ちはじめました。

なにしろ、1876年（明治9年）の京都府師範学校創立にまでさかのぼる、永い歴史をもつ大学です。発見された教材、教具は明治以来の日本の学校教育の変遷を伝える貴重な資料になると考えられました。しかしながら耐震改修後の研究室に、使うことのない古い教材を置いておく余裕はありません。

このまま事態を放置していると、せっかく見つかった歴史資料が失われてしまうのではないかと危惧した

学術委員会は、歴史的な教材や教具が残されていないか、全学科に問い合わせをおこないました。附属図書館の小林事務長（当時）に岡本正志教授も加わり、理学科の大学院生も協力して保存プロジェクトが立ち上がりました。まもなく当時の寺田光世学長の命で教育博物館構想ワーキンググループがつくられ、集まった教材・教具、考古学上の発掘品、さらには歴代の教官が製作した美術作品や収集された楽器を、大学として保存・整理することになりました。そのためにまず5



つの収蔵室（写真左）と、講義ができるシアター（写真下）を整備し、学内組織として教育資料館が2011年（平成23年）8月に発足したのでした。



もちろん、資料は学内で役立てるだけでなく、その存在を広く世に知らせて、学校教育、社会教育などの「まなび」に活用してもらわねばなりません。それには所蔵品を公開し、時宜になかった企画展を催すことのできる施設が必要です。その施設を大学博物館とするのであれば、135年以上にわたる本学の歴史をしめす資料も展示したいところです。旧司令部の建物を復元したのも、展示施設として用いようという構想があつてのことでした。学内公募で館名が募られ、学生課職員の宮本幸さんの命名「まなびの森ミュージアム」が採用されました。

### いざ、開館！

2011年（平成23年）11月12日、まなびの森ミュージアムがついに開館しました。大講義室Ⅱで開館セレモニーが執りおこなわれ、エジプト考古学者の吉村作治氏（早稲田大学名誉教授）と、前副学長で本学環境教育実践センター教授の岡本正志氏による記念講演がありました。吉村先生をお招きしたのは、本学が所蔵する古代エジプトのミイラの鑑定をお願いした機縁によります。テレビで知られている吉村先生の人気もあって、朝9時の受付開始を前に、何十人もが列をなす賑々しい幕開きとなりました。

吉村先生は「まなびのよるこび～私を魅了する古代エジプトの世界～」の題で、若いころの発掘調査の体験談をまじえ、ご自身の古代エジプト研究の歩みをユーモアたっぷりにふりかえられました。岡本先生の講演「科学の歩みと理化学実験器具」は、後に述べる

開館記念企画展「理化学実験器具の世界」の基調講演ともいえるものでした。真空をつくりだすマグデブルクの半球の紹介に始まり、ルイ16世のフランス科学アカデミー訪問を描いた絵画を科学史の立場から読み解かれて、聴衆を魅了されました。

かくて開館セレモニーには、250名もの来場をいただきました。それに先だち全国紙に報道がされ、地元紙の『京都新聞』は10月26日の朝刊第一面で、まなびの森ミュージアム開館を大きな写真入りで報じました。社会的な反響は私たちの予想以上でした。ミュージアムの創設は、大学から社会への、見えるかたちでの研究成果の還元と捉えられたのでしょうか。社会への働きかけの大切さを、大学人として改めて感じた体験でした。

### はじめての企画展

オープニングにあたり、開館記念企画展「理化学実験器具の世界」が、まなびの森ミュージアムで11月12日から12月9日まで開かれました。本学には明治期から戦後にかけて、およそ200点の理化学実験器具が伝わっています。その領域は広く電磁気学や光学、熱学、力学、音響、流体におよび、化学標本や測定機器なども含まれます。現在使用されているものくらべると素朴ですが、かえって理化学の原理がよくみてとれて、新鮮です。この企画展では本学に伝わる実験器具のうち、60余点を選びました。

静電気をたくわえて放電する「電卵」や、力を増幅する水圧機の原理を可視化した「ブラマ氏水圧機模型」（写真上）など、見た目にもうつくしい実験器具のほかに、動かせるものについては実演もおこないま



した。たとえば、京都師範学校が旧蔵していた島津製作所製のケーニッヒ氏躍焰波動用火口（写真中右）です。この器具は集音器に伝わった音がゴム製の振動板をふるわせると、炎の大きさが変化するように設計されています。その炎を光四角廻転鏡（写真中左）を回転させて映してやると、反射鏡上に炎の波形が正弦曲線のオシログラフ

となって現れる仕組みです。理学科の学生たちの実演はつねにうまく行くとはかぎりませんでした。見た人には「音が振動である」ことがよく認識できたことでしょう。

前川科学機器製作所製の地球運動模型（前ページ右写真下）も、子どもたちを前にして動かして、学生たちが解説しました。地球と太陽の運行をしめした模型で、電球を太陽に見たてて、光の当たる部分が昼、当たらない部分が夜になるようになっています。ハンドルの回すと地球が公転すると同時に、ギアチェーンが回転し、自転のようすも見られる仕組みになっています。電球の下には方角・四季・日付が書かれたプレートがあり、世界各地の季節の変化や、昼夜の長短、寒暖、日の出、日の入りの時刻などを説明できます。

わが国の理化学教育の歴史の一端をしめし、科学のおもしろさを体感していただける企画展になったのではないかと自負しています。この企画展は学生教育の場ともなり、実演だけでなく、パンフレットの解説文も教員の指導の下、学生諸君に執筆してもらいました。会期中は月・水・金曜日の午後に加え、日曜と祝日にも開館したせいもあり、総計346名の方にご来場いただきました。

### ミイラもあります——収蔵品の紹介

さて、教育資料館に所蔵されている、師範学校以来の教材・教具・作品をご紹介します。すでに開館企画展との関連で触れた理化学実験器具は省き、主だったものを中心に記すことにします。

まず何といっても目をひくのは、古代エジプトのミイラ（写真）でしょう。ロビー近くに理学科の生物標本



室から見つかった3点のミイラが展示されています。藁を敷き詰めた縦47.0cm、横24.0cm、高さ12.4cmの木箱に収納された状態で見つかり、木箱の内面には「エジプトノミイラ 本科二部一年 大崎隆平寄贈 父秀三郎採集 昭和十四年十月寄贈」と記されています。

寄贈者である大崎隆平氏は、すでに鬼籍に入っていますが、弟の国平氏の話によると、ご兄弟の父で貿易商社員であった秀三郎氏は、1920年より足かけ3年間にわたってエジプトに滞在されたといえます。本資料は、氏が帰国に際して骨董品などとともに持ち帰ってこられたものようです。秀三郎氏の収集資料は、大阪の三越百貨店で展示されたこともあったそう

ですが、その後、隆平氏が本学に入学したことを機に、ご家族の意向を受けて、本資料のみが寄贈されたということです。

3点のミイラは、脛から下の左足（写真の右）、左足の甲（同中央）、右手首（同左）で、それぞれ別人のものであることが分かっています。このうち、もっとも保存状態がよいのは脛から下の左足で、樹脂で固められているようすや、遺体を巻いた布の痕跡などを観察することができます。

制作方法から見て、古代エジプトのものであることはまちがいありません。放射性炭素年代測定からはB.C.831年からB.C.796年にかけての年代が与えられ、また、解剖学的な見地からは、身長152.9cmの女性であることが判明しています。駐日エジプト大使館が返還をもとめず、本学での保管・展示を了承したきわめて珍しい資料といえます。

### 紙幣のコレクション

社会科学科の日本史学研究室が受け継いできた、江戸時代から明治時代初期にかけての紙幣、1100点以上のコレクション（写真はその一部）も保管されています。どのような経緯で本学の所蔵となったのかは不明ですが、1962年に二条城において開催された「明治天皇50年祭記念 幕末・維新にみる開国文化展」に、「藩札と社寺札」として出陳されたものであることが分かっています。

コレクションは縦向きでB5判厚紙を蛇腹状にテープでつなぎ合わせ、表裏両面の上部と下部に糸をわたして、1枚あたり3点（表裏で6点）の割合で固定されていました。おそらく、展覧会において展示された状態のまま収蔵されていたのでしょう。しかし、劣化によって糸が切れてしまい、厚紙からはずれてしまった資料も多くありました。また、ガラス扉の書棚に無造作に納められていたため日焼けが起きている資料も存在し、残念ながら保存状態は必ずしもよいとはいえません。

江戸時代の貨幣というと、江戸幕府が発行した金貨・銀貨・銭貨のいわゆる三貨が有名で、高等学校の日本史の教科書でも大きく取り上げられています。その一方、江戸時代に使われた紙幣に関しては、あまり記述がありません。三貨の不足と藩財政の窮乏を補う目的から、藩が発行した藩札や商人が発行する私札が存在したと記されるにすぎません。

しかし、1871年の廃藩置県に際して明治政府が行った調査によると、じつに8割の藩が藩札を発行していたとされます。藩札を発行した藩では、藩札の発行にともない領内での三貨の使用を禁止し、藩札のみ

を流通貨幣として認めることが一般的でした。したがって金貨・銀貨・銭貨といった三貨を見たことのない人も多く存在しました。また、紙幣の発行は、大名が統治する藩に限ったものではなく、旗本や宮家、社寺、町村、宿駅など各地で行われており、江戸時代の地方経済は三貨といった金属貨幣ではなく、紙幣を基本に成り立っていたと見なければなりません。

江戸時代の紙幣の多くは、15cm前後の縦長のものです。別々に印刷された2枚の紙の背を貼り合わせ、表裏としているのが通常の形状で、七福神、鶴亀、松竹梅、稲穂、宝珠といった縁起のよいモチーフを描き、金額、発行年、発行所、引替所などを記しています。紙幣は信用貨幣であるため、幕府が発行した金貨・銀貨・銭貨を本位に定めていることが一般的でした。「この札、持参次第、銀子渡すべく候」というように、引替することを明記している紙幣も多く存在しました。一方で、三貨を基本とせず、米で価値を表した米札（写真の左）や、「傘壺本」と記した傘札（同



中央)、「煎茶壺袋」と記す煎茶札（同右）など、地域特有の紙幣も存在しました。このような多種多様な紙幣の様相からは、貨幣すら統一されていない江戸

時代の地方分権の状況を、容易に見いだすことができます。

江戸時代の紙幣を所蔵する機関は、日本銀行の貨幣博物館を筆頭に多く存在します。しかし、収藏品目録を公開し、利用の便に供しているのは、現時点では国文学研究資料館などわずかな機関しかありません。教育資料館では、こうした現状に鑑み、所蔵する紙幣のほぼ全てをデータベース化し、ホームページ上での公開を行っています (<http://manabinomori.kyokyo-u.ac.jp/shiheishi/shiheitop.html>)。

### 地質・岩石標本

教育資料館は岩石、鉱石、化石等と地質鉱物関連の資料も保存しています。まなびの森ミュージアムでは教材・教具を中心に、とくに京都で採取されたもの、京都にゆかりのあるものを展示しています。地質や岩石は一般の生活の中ではなじみが薄く、過去につくられた遠い存在で、私たちの生活からかけ離れたもの、というイメージがあるかもしれません。しかし果たしてそうでしょうか。私たちの生活を支えている大地はまさにこの地層や岩石です。生命はその大地で産声を上げ、そして進化して今の私たちがあるのです。この

ことを考えれば、地層や岩石は連綿とした長い歴史のなかで確実に私たちと繋がっていて、いつも私たちの身近にある自然ということができるのではないのでしょうか。

展示の最初にある、花崗岩（火成岩）とホルンフェルス（変成岩）という岩石に注目してみましょう。花崗岩は京都の象徴でもある大文字山の山道入口に見られる岩石です。御影石とも呼ばれ（神戸市御影より由来）、墓石、灯籠、庭の踏石など私たちの生活の中で普通に目にする岩石です。京都を流れる白川は花崗岩の風化物（真砂）が河底を白くしているところからその名前が付けられたとも言われています。この真砂は、京都では白川砂として知られ、昔から社寺仏閣の庭園を敷きつめるために欠かすことのできない白砂として使われてきました。



一方、ホルンフェルスは聞きなれない岩石だと思えますが、ドイツ語の horn（角）と felsen（岩石）から「角の

ように固い岩石」という意味をもち、その名の通り非常に固く、岩石中にはキンセイ石という鉱物が晶出しています。最初は堆積岩の泥岩や砂岩だったものが、マグマ由来の花崗岩がまだ冷え切らない状態の時（約9000万年前）にそれに触れ、熱のためにもとの岩石とは異なる性質の固い岩石に変化したものです。熱い岩石に接触して別の岩石に変化することから接触変成岩と呼ばれています（写真は堇青石ホルンフェルス）。

こうしてできた固い岩石であるホルンフェルスが現在の大文字や比叡山の山頂をつくっているため、風化に耐え昔からの山の形を今に残しているのです。その一方で、先に述べたように、花崗岩は風化にもろく、歳月とともに白砂の真砂へと変化し続けて白川の名を残しています。これらの岩石の他にも近隣で採取されたバラ輝石やホウカイ石結晶、日本画の顔料や鳥居の朱色としても用いられる辰砂など、今ではなかなか採取困難な岩石・鉱石を展示しています。

大学周辺の深草で採取されたトウヨウソウの白歯化石（次ページ写真）も興味深い資料の一つと言えるでしょう。展示物はレプリカですが、京都教育大学と京都大学を中心とした調査団により1966年に発見されたものです。この化石は大阪層群と呼ばれる地層（100～60万年前）から見つかりました。その場所は今では名神高速道路や住宅地となり、もはや当時のようすをうかがい知ることはできませんが、同様の地層は京都盆地の丘陵地に京都市を取り囲むように広



がっています。京都では竹林や筍畑が見られる地下に、大阪層群が分布していることがよくあります。この地層は、当時の河川や氾濫原にたまってできた地層であることから、その当時、この辺りにもゾウが水をもとめてやって来ていたことが分かります。実物標本は京都大学総合博物館に収蔵されています。



この他にも京都南部の宇治田原地域から見つかった貝化石や植物化石など約1500万年前の化石を展示しています。こうした化石の証拠から、その頃の日本はちょうど現在の沖縄あたりの気候に似ていて、非常に暖かかったことが分かっています。このように今の京都からは想像できない世界があったことを、岩石や化石の展示が教えてくれるのです。

### その他の収蔵品



教育資料館には、上記の収蔵品のほか、製造番号より1909年に造られたことが判明する明治時代の足踏み

式オルガン（写真）、戦前から戦後間もない時期の本学のような事務文書や映像、ホルマリン漬けされた多様な生物標本、日本だけではなく世界各地で奏でられている楽器、本学が行った発掘調査で出土した考古学資料などが存在し、多方面の分野にわたっていることが大きな特色です。展示全体として本学の教育・研究のあゆみを物語っているものといつてよいでしょう。

なかでも美術作品については、本学の教員であった松田尚之の具象彫刻や山内観の漢字の書を中心に、数多くの作品が残されており、現在、まなびの森ミュージアムとは別に、美術作品のための収蔵室を整備し、展示スペースとして今春の公開を目指しています。収蔵室にはいまだ整理途中の資料も数多く存在し、また、学内には教育資料館が把握できていない価値の高い教材・教具・作品などが多く眠っているものと思われます。今後、整理・調査を進めて、教育・研究にとって有益な資料をさらに提供できるようにしたい、と考えています。

### 来年度のまなびの森ミュージアムもお楽しみに！

まなびの森ミュージアムでは、2012年度にもさ

まざまなことを計画しています。まず地域連携事業として、3回の公開講演会を予定しています。第1回は4月14日（土）のふれあい伏見フェスタで、美術科の谷口淳一教授と岡田直樹教授が、「彫刻・書に親しむ」と題して、それぞれの専門である彫刻と書道を楽しむみ方を説いたあと、展示スペースに生まれ変わった収蔵室へご案内します。

10月3日～11月29日には、京都大学ミュージアム連携の合同展覧会「大学は宝箱！—京の大学ミュージアム収蔵品展」（京都大学総合博物館）に出品します。大学ミュージアム連携には、京都の13大学が持つ14の博物館・美術館が参加していて、それらを巡るスタンプラリーも計画されています。

むろん、本学独自の企画展も構想中です。公開講演会のあと二回も、京都教育大学の歴史を映像資料で探訪するとか、所蔵している楽器で演奏会をひらくとか、いろいろなアイデアを検討中です。詳細が決まり次第、ホームページ等でお知らせします。また授業でも、学芸員資格をとるための博物館実習等で、まなびの森ミュージアムが利用されていくことになるだろうと思います。

最後になりましたが、教育資料館は組織としては附属図書館長が教育資料館長を兼任し、教育資料館運営委員会が審議機関となっていますが、実際の運営は運営担当者に任じられた教員の方々の協力に頼っています。学生のみなさんにも、ぜひ積極的に企画運営に参加してほしい、と思っています。大学ではなにも授業だけから学ぶのではありません。博物館実習などを履修した学生諸君にもぜひ加わってもらって、今後の企画展も学生のみなさんと一緒に考え、作り上げていきたいと願っています。

**執筆担当：**所蔵品の紹介は「地質・岩石標本」（田中里志・理学科准教授執筆）をのぞき、教育資料館次長の吉江崇（社会科学科准教授）、その他の部分及び全体の統一は教育資料館長の太田耕人（英文学科教授）が担当。

**参考文献：**京都教育大学120周年記念誌編集委員会編『京都教育大学百二十年史』（2001年）、武島良成「第19旅団司令部と京都連隊区司令部の来歴—京都教育大学内の戦争遺跡をめぐって—」（『京都教育大学紀要』No.117、2010年1月）、開館記念企画展「理化学実験器具の世界」パンフレット（京都教育大学教育資料館・まなびの森ミュージアム、2011年）

## 台湾との教育研究交流 四半世紀

発達障害学科教授 田中道治

昨年3月初旬、学部学生、特別専攻科生、そして大学院生等総勢15名とともに台湾師範大学及び台東大学を訪問し、特別支援教育研究（特殊教育研究）を交



写真1

流する機会を持った。台湾師範大学（写真1及び写真2）を会場にした交流会（写真3）では日本における障害児の実態把握のための心理テストの適用及び交流・共同教育の実際を報告し、台湾側から特殊教育対象児者の全国調査結果及び知的障害児の音韻特性の実験結果について報告された。どちらも現職教員の特別専攻科生と大学院生の研究報告であり、教育実践上で得た問題意識のもとでの研究発表で大変興味深いものであった。

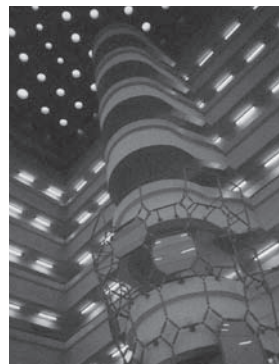


写真2



写真3

台湾師範大学は1946年に創設され、台北市内にあって元々中等教育教員の養成が中心であったが、現在10学部（教育、文学、理学、芸術、科学、運動、国際、音楽など）を有す総合大学へと拡大変化し、台湾大学や政治大学に並ぶ台湾有数の国立大学である。大学生、修士院生及び博士院生は計15,374名である。私達が研究交流を行なったのは教育学部特殊教育学系（写真4）の教員及び大学

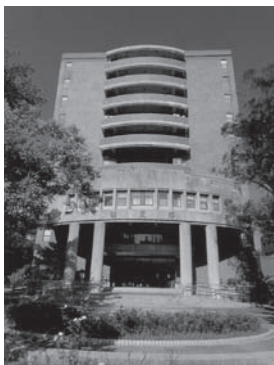


写真4

院生・学部生である。日本と大きく異なっているのは、特殊教育学系のなかに障害児教育と英才児教育という二つの専門分野が含まれていることである。例えば、今日我が国の文科省が特別支援教育という新しい教育システムをスタートさせ、特に知的には遅れてはいない、むしろ優秀なアスペルガー症候群、ADHD、高機能自閉症などの発達障害児の教育並びに研究が台湾では英才児教育（研究）の対象にもなっているところである。少し早目に大学に到着した私達（学部



写真5

学生と筆者）は、学系長の郭静姿教授及び邱紹春教授のご厚意によって、大学の近くの中華料理店でフルコースの食事をごちそうになった（写真5）。



写真6

台北市内に滞在している間、蒋介石の記念像が配置されている中正記念堂を見学することになった（写真6）。正面に向かって両端に銃を持ち微動一つしないまま1時間立ちっぱなしの憲兵が、交替式を行なっているシーンに遭遇することができた。孫文に師事した蒋介石は、国民政府主席となり、抗日戦争で国共合作により共産党と協力したが、内戦に敗北し1949年台湾に退いている。中正記念堂からは、ちょうど辛亥革命（1911年）で臨時大総統に就任した孫文を称える「孫文革命100周年記念式典」が催されていた（写真7）。



写真7

台湾師範大学での研究交流を終えた後、次の交流先である台東大学へ約1時間かけて飛



写真8



写真9



写真10



写真11

行機で移動した。

台東市は台北市から南東の位置にあり、市街地から車で半時間ぐらい走ると太平洋を眺望することができる(写真8)。春風を浴びながら白波を見ていると、同じアジアでありながらも日本と台湾の違いを実感し、同時に研究交流が成功裡に終わることを祈っていた。富岡漁港がすぐ近くにあり、大漁と海の平安を祈願して「安天宮」が建立されていた(写真9)。台東大学では、幼児教育学科の黄先生の授業のなかで、日本の特別支援学校の紹介(写真10)や「障害児の自己の発達」の講義を行った。受講生たちの学習活動は非常に積極的であり、通訳をしていただいた黄先生を立ち往生させるほど、質問や意見が絶えなかった。台東では、大学の宿泊施設でなく、民宿(写真11)を利用したが、宿泊者のニーズを十分

配慮した設備が整えられており、快適な時間を過ごすことができた。

短い訪問であったが、台東から台北への帰路は台東

豊年機場(豊年空港)から再び飛行機を利用した。雲の合間から緑の大地を見ながら、そして花蓮や太魯閣を見降しながら、黄先生をはじめ多くの方々に丁寧に対応していただいたことに感謝の気持ちでいっぱいになっていた。同時に、はじめて台湾を訪問し、研究交流をした25年以上前のこと、それ以降4年~5年間隔で訪れては交流を繰り返してきたことが次から次へと甦ってきた。

1984年7月、筑波大学教員訪台団の一員として、英才児教育研究を交流目的に台湾師範大学を訪問した。国際英才児教育研究連盟の会長呉武典教授から学習過程における媒介機制的説明を詳しく拝聴できた。その折に台湾原住民族の高砂族の方々との異文化交流



写真12

も忘れがたい思い出である。1995年12月、台湾国内の教育学及び心理学関係の図書出版の中心である心理出版社から「障害児の発達と学習」(清野茂博・田中道治著、コレール社)の中国語訳が刊行(写真12)された際、翻訳者の邱紹春教

授、コレール社の関係者、大学院生、そして筆者の4名で台湾国内(台北、台中、彰化、高雄、台南)を出版記念講演会の旅をしてまわった。また2008年2月、台北市内の療育施設及び知能開発センターとの研究交流では、京都教育大学の学部生、熊本大学大学院生、そして市内保育園園長と一緒に訪台し研究報告及び実践報告を行った。

「まもなく台北空港に着陸します」との機内放送にふと我に戻り、再び台東で充実した時間をもてたことに心満たされていた。そして、これからも今まで以上に実りある台湾との交流を続けていきたいと思った。

(附記) 昨年3月末、台湾師範大学から25名の方々が京都教育大学に来られ研究交流をしました。また11月中旬、王華沛先生による「大学における障害学生の支援システム」の講演会が本学を会場にして催されました。京都教育大学の学生の皆さまには、台湾師範大学での留学経験を心から期待しています。

## 日本、ありがとう！

教育学研究科理科教育専修 **Kek Lay See**  
ケック・レイシー（マレーシア出身）

私は2年前にやっと日本に留学ができました。日本語の勉強や日本文化に触れることが目的で日本を留学先として決定しました。特に日本の伝統文化を身を以て体験できるように、京都にある大学を選択しました。学校での勉強は確かに大事だと思っていますが、学校そのものの枠組みから離れて、京都市内或の地域の人々と触れ合うことは日本社会への理解に役立つと思いました。そこで、日本に留学しているうちに、興味を持っていることについて様々な場面で活動しました。

日本に来てから最初の一年間は、模索した日々を送りました。そのときは、日本語を全然聞き取れませんでした。電話をかける勇気もなかったです。日本語が自分の心では分厚い壁になってしまった気がしました。しかし、これをどうしても乗り越えたくて、勇気を出して積極的に考えなければならぬと自分を励ました。大学の掲示板にある情報によって留学生向けの活動やイベントなどの情報を手に入れることができました。

小中学校での国際交流は、自分にとって日本の子どもたちや学校教育への理解を深める第一歩でした。国際交流では、国の歴史からお菓子作り体験まで及ぶ活

動を紹介してあげました。始めはうまく国際交流ができませんでした。それは自分の日本語の力が不足していたために母国のことを伝えられなかったからです。さらに、国際交流を通じて、「書を用いるときに至って、まさにその少ないことを恨む」という知識不足を実感しました。それは、児童や生徒の質問に答えられなかったことがあるのです。そこで、自分でもう一度勉強し直すことが必要だと思いました。

ホストファミリーは私の留学生活に彩りを添えました。日本人の暮らす習慣などに接触するため、ホストファミリーに応募しました。私のホストファミリーの家は大学の近くにあったので、よくそこに寄りました。たまに、ホストファミリー家族と一緒に美味しいご飯をご馳走していただいたり、京都のことを聞いたりする時間を過ごすことができました。こうして、日本人の家庭や京都についての知識がだんだん増えてきました。また、ホストファミリーのおかげで、日本のお琴に触れてみました。加えて、2011年2月、機会を設けていただいて、京都の御香宮神社において尺八と合奏し演奏しました。約4カ月間お琴の先生の丁寧な指導のおかげで、当日は胸を張って歌いながらお琴を弾いて、無事に終わりました。それは日本で初めての体験なので、達成感を味わいました。

2010年は京都で第21回関西留学生音楽祭の募集に応じて、他のマレーシアの友人と参加しました。10人構成のチームが作られて、マレーダンスを発表することを決めました。10人のメンバーはそれぞれ違う大学で、しかも勉強も忙しかったので、練習時間はあまりなかったです。それにもかかわらず、演出の日を目標として、わずかな練習時間を大切に、やっと最後まで自国の舞踊を披露しました。オーディションから本番までせわしかったです。いい思い出ができたので、非常に楽しかったです。



1. 夏、リンピア（京都府、宮津市）でリーダー養成キャンプに参加して、子どもたちと交流してマレーシアのことを紹介しました。
2. 子どもたちとカッター訓練を受けました。
3. 中学校で生徒と国際交流活動をしました。



2010年11月28日、京都会館で行った第21回関西留学生音楽祭に参加して、マレーシアの友達とEmbung Soksekというマレーダンスを踊りました。

また、私は日本の着物と温泉が好きです。2011年3月に行った京都の伝統産業の日で、無料で着物を借りられることだけでなく、着ることができるというものでした。このようなチャンスを見逃さないように、応募し参加しました。その日にも、着物で文化観光施設の入場無料や市バス・地下鉄乗車無料などの特典があったので、一挙両得でした。とても嬉しくて充実した一日を過ごすことができました。そのほか、温泉に入ることも好きです。頻繁に温泉に行くことはできませんが、たまに大学で行う見学ツアーに参加し、宿泊するところに温泉があれば、必ず入ります。



1. 琴で「川の流れるように」を弾きました。  
 2. 2011年京都で行った「伝統産業の日」にきものを着せてもらいました。  
 3. 2011年1月ホストファミリーと愛宕山(京都)に登りました。

2011年の7月と8月下旬に、東北でボランティアをしました。テレビで東北大震災の被災者の状況を見ると、袖手傍観すべきではないので、自分が少しでもみんなの力になりたいという気持ちがありました。そして、台湾慈濟仏教基金会という慈善団体に参加し、世界39カ国から寄せられてきた義援金を、見舞金と

して配布する手伝いをするため岩手県の山田町に行ってきました。現地に到着すると、津波に奪われた岩手県の沿岸の住宅地は空地になってしまっていて、惨憺たる光景が目にとまりました。この風景を見てみると、自然の威力を感じて人生の無常が一層胸に刻み込まれました。見舞金をもらった被災者と出会うと、「ありがとうございます、お元気でね」と一言挨拶しました。この言葉で少しでも被災者たちが元気になるれば、良かったと思いました。ある被災者たちは、自身の津波との遭遇を私たちボランティアに述懐し、それを聞くと言葉が表されなかった感触を得ていました。



1. 2011年7月下旬台湾慈濟仏教基金会に参加して、岩手県山田町で見舞金配布というボランティア活動をしました。  
 2. 見舞金をもらった被災者は感動して、台湾慈濟仏教基金会のボランティアに励めの言葉をかけてもらいました。

こうして、日本に留学していろいろ思いがけなく出会うことができました。それこそ、忘れ得ぬ思い出となりました。私はもうすぐ留学を修了します。この3年間無事に日本で過ごすことができ、いろいろな人々から恩を受けたことを心より感謝します。これからの日本、そして震災に遭われた被災地住民の方々が平和に暮らせますよう心よりお祈り申し上げます。

最後に、日本こそ、色々な面で勉強になりました。「日本、ありがとう！」

## 料理の文法!?

国文学科教授 森山卓郎

料理の名前にも文法があります。てはじめに「コロッケ+カレー」と「カレー+コロッケ」を比べてみましょう。「コロッケカレー」は「コロッケがのせてあるカレー」ですが、「カレーコロッケ」は「カレー味のコロッケ」です。ここにはどんな文法があるのでしょうか。そう、簡単ですね。日本語では、名詞と名詞が一緒になって複合名詞になった場合、後ろにくるものが中心の言葉になるというルールです。

中部地方の名物メニューの「みそカツ」も、後ろに「カツ」があり、全体として表すのも「カツ」です。もし順序を入れ替えて「カツみそ」というと例えば「味噌カツのためのみそ」のようなものを想像してしまいます。

ちょっと名前が難しいのですが、「金時+豆」「きんぴら+ごぼう」も同じルールです。もちろん「金時豆」はあずきのこと、要するに「豆」ですし、「金平ごぼう」は細く刻んだ調理をした「ごぼう」のこと、というわけで、ちゃんとルールに則っています。ちなみに「金時」は「坂田金時」という人名から来ています。彼は鬼退治の物語などに登場する平安時代の武将源頼光の四人の強い家来の一人で、江戸時代の浄瑠璃などで活躍したヒーロー。幼少時は「金太郎」です。赤茶色のあずき色の顔だったから、その色の小豆を表すことになったのです。さらに、「金平」はその息子としてこれまた江戸時代の浄瑠璃でご活躍のヒーローです。「金平ゴボウ」には辛子が少し入っているのですが、金平の強さにちなんで、「堅くて辛みのあるゴボウの料理」ということで、この名前がついたとか。わが生協食堂の金平ごぼうにもきちんと辛子が入っています(おいしいよ!)

さて、もしも順序を変えて「豆金時」「ごぼう金平」だったら、後ろが意味の中心になるわけですから、意味はまったく変わって、「なんだかかわいくてちっちゃくて弱そうな金時さん」とか、「ひょろ長くて弱そうな金平さん」とかになってしまうのではないのでしょうか。やはり文法って大切ですね。

では、動詞と名詞がある場合はどうでしょう。ここでもルールは健在です。「焼き肉」「煮豚」「焼き魚」のような料理でも、同じようなルールが見いだせます。すなわち、

料理法(動詞連用形)+材料(名詞)  
という順序であれば、意味の中心は後ろにあることに

なります。例えば、「焼き肉」は「焼いた肉」だし、「煮豚」は、「煮た豚」です。やはり後ろにくる成分が意味の中心になっています。

一方、逆に後ろに動詞が来る料理名もあります。この場合はどうなのでしょう。「生姜焼き」「すき焼き」「竜田揚げ」などの表現です。つまり、

名詞(調理法にちなむもの)+料理法(動詞連用形)という形で一語の複合名詞になる場合です。しかし、ご心配なく。この場合も、後ろが意味の中心だということは言えそうです。後ろに来るのは調理法にちなむ動詞ですから、全体として「そのような調理法」、「そのような調理法による料理」を表します。

ここで使われる名詞は、「その調理法にちなむ名詞」です。例えば「すき+焼き」は、まだ肉食が一般化していない時代の調理法として農具の「すき」で焼くところから来ているとされています。「生姜+焼き」は味付けに生姜をからめて焼く料理。「竜田+揚げ」もそうです。この点は意外と文学的だから少し解説が必要でしょう。実は「竜田」と言えば紅葉の名所(近鉄でもJRでも王子駅あたりが便利でございます)。在原業平「ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは」、能因法師「あらし吹く 三室の山の もみぢ葉は 竜田の川の 錦なりけり」などの歌があります。しょうゆにつけ、かたくり粉をまぶして揚げる、いわば唐揚げの一種ですが、紅葉のような色になるところから紅葉の名所の「竜田」という名前がついているのです。いささか強引な命名のような気もしますが、大変に雅びですね。ということで、後ろに動詞がある場合も、動きが意味の中心となって、やはり「そのように調理をした料理」という意味になるわけです。複合名詞では後ろの部分が意味の中心になる、とまとめられそうです。

これに材料を合わせて表現することもできます。この場合、一語の複合名詞ではなく、「の」で名詞をくっつける名詞句の表現です。「鶏肉の竜田揚げ」「豚肉の生姜焼」などです。

名詞(材料)+の+[名詞(調理法にちなむ名詞)+動詞(連用形)]  
という形で、この「の」は同格的な関係、すなわち、イコールの関係です。ですから、「の」の前の表現(すなわち材料の名詞)が意味の中心になります。

こう考えると、「鱈子のマヨネーズ和え」「マヨネー

ズの鱈子和え」という微妙な違いも説明できます。この二つでは、鱈子の量に違いがありそう。すなわち、鱈子がメインでそれにマヨネーズが和えてあるという姿ならば、「鱈子のマヨネーズ和え」（あたしゃこっちが好きですな）。マヨネーズの中に少し鱈子が混ぜてあるというのなら、「マヨネーズの鱈子和え」になります。後者はそれだけでは料理になりにくいかもしれません。

ちょっとややこしいですが、同格関係を限定的な修飾の関係に言い換えることもできます。つまり、「鱈子のマヨネーズ和え」は



本学生協食堂の金平牛蒡と卵焼き  
(メニューでは「だし巻き」)  
ちなみに、ともに63円！（2012年2月）

「マヨネーズ和えの鱈子」とも言い換えられますし、「マヨネーズの鱈子和え」は「鱈子和えのマヨネーズ」にも言い換えられます。つまり、「の」の使い方如何によって、

[名詞(料理法にちなむ名詞)+動詞(連用形)]+の  
+名詞(材料)

という言い方もできるのです。

こうして考えてくると、「ローストビーフのほうれん草巻き」、「ほうれん草巻きのローストビーフ」、「ほうれん草のローストビーフ巻き」、「ローストビーフ巻きのほうれん草」という四通りの言い方の意味も、大きく二通りの料理に整理できます。考えてみてください。まあ、胃袋にはいたら皆同じかもしれませんが。

このように、日本語の文法を理解しておれば、私達は幸せな食生活が送れます。ところが、実は「文法」も困ることもあるのです。例外っぽい料理の存在です。

まず一つはあの有名な「ライスカレー」と「カレーライス」。この二つは同じものです。これはどう説明するのか。もとは「カレーアンドライス」で、「ライスカレー」も「カレーライス」も並列的な関係だったという可能性もあります。ただし、私の語感では、今は「カレーライス」の方が一般的。そうするとやはり「ライス」が後ろに来ていて、「カレーをまぜて食べるライス」を表すと言えます。だとすれば後ろが中心という順序はルール通りで、カレーと共にライスをがつり食べられるわけで、本当の例外にはなりません。

例外っぽいものの第二弾は、「肉じゃが」。これも、「肉とじゃがいもを煮あわせたもの」で「じゃがいも」が中心だとは言えないかもしれません。しかし、じゃがいもの方が多いのは確か。「肉入りのじゃがいもの料理」と考えれば、「じゃが肉」ではなく「肉じゃが」

だと説明できるので、まあ、これも強力な例外ではないことになります。

ただし、手強い例外もあります。それは「じゃがバター」。「じゃがバター」は焼いたじゃがいもにバター（一）を載せた料理。「バター」が中心ではありません。「バターじゃがいも」だったらルール通りなのですが、順番が違うのです。「じゃがいも」と言わないで「じゃが」としか言わないところに何か深い訳があるのかもしれないのですがよくわかりません。もしかして、「じゃがいものバター味」のような言葉が元にあって、それが省略されたのかもしれませんが。うむむ、ちと困った。

動詞と名詞のつながりで見れば「卵焼き」も例外。「茹でる」のなら「ゆで卵」だし、「炒る」のなら「炒り卵」となるのに「焼き卵」とは言いません。この「卵+焼き」という構造は、動詞が後に来ているから、むしろ「草刈り」と同様に、「～すること」を表すはずなのです。もしかして「卵焼きをする」のような言葉が元になったのかもしれませんが、よくわかりません。これも困る。

同じように、「海苔巻き」「卵巻き」「昆布巻き」などと「鉄火巻き」「胡瓜巻き」などもルールに大きな違いがあります。「海苔巻き」は「海苔」で巻く料理を表します。そして、「卵（の焼いたもの）で巻く」のが「卵巻き」、そして、「昆布で巻く」のが「昆布巻き」となっています。これは先述のルール通りですね。

しかし、これに対して「名詞+巻き」という形は同じでも、「鉄火巻き」「胡瓜巻き」は、「鉄火」「胡瓜」をご飯と海苔で巻いているので例外です。中身なのかまわりなのか大きく違うわけですが。「鉄火巻き」が「ごはんを超絶技巧で鉄火でもって巻き固めた料理」だと「海苔巻き」と同じ構造になるはずですが、そんな料理はなさそうです。

こうした例外の説明は難しいのですが、文法的には「海苔巻き」のような構造が基本にあって、海苔とご飯で何かを巻くという型が成立してから、それをもとに、「中身+巻き」という新たな構造の枠組ができ、それに当てはめる形で「鉄火巻き」「胡瓜巻き」「納豆巻き」などができたと考えればいいのかもしれませんが。「中身+巻き」という関係の食べ物が巻物のお寿司に限られるとすればこの説明でなんとかOKということになるでしょう。どうでしょうか。

そう、文法について考えることは、ルールを見つけること、そして、「見つけたルールの例外」と戦うこと、です。しかし、腹が減っては戦はできぬ。今夜は二品増やして「卵焼き」と「じゃがバター」でも食べながら、それらの料理名の背景にある言葉のルールについて考えることにしましょうか。

## 京都教育大学の樹木について

美術科教授 岩村伸一



赴任した頃のこと、時間があれば木を見上げて歩き、なんと見事な樹木があるのだらうとわくわくしました。クスノキ、ケヤキ、カシ、エノキどれも本来その木が自然の下で獲得する形に枝を広げています。都市化が進み豊かな緑が遠くに退いた現在、おそらく大学こそが街中で植物を存分に育てることのできる場所なのではないかと思われました。普通の街並みを相手にしてきた植木屋にとっては、有望な素材の数々にうれしくなってしまう眺めでありました。

それから10数年がたち、木々もまたひとまわり生長しました。わたしはいつの間にかこの環境に深く関わることになっています。この大学構内のどこでもいいのですが、そこに立ってまわりの木々を見まわしてください。どう感じられるでしょうか。わたしは「なんとか、ひとつの森としてまとまりのある風景になろうつつあるな。」と思っています。

多くの樹木が繁茂し、自然を感じさせる緑濃い環境となっています。しかし、自然のみでこの森が成り立ったわけではありません。これらの木々は、大木には旧陸軍時代からのものもあるでしょうが、ほとんどは大学の移転期、学舎新設期を通して、農業や生物学分野の教員のひとかたならぬ努力で続けられてきた植栽の結果であります。とりわけキャンパスの近隣にあった林業試験場から、多くの樹木の提供を受けることができたこともその理由であったと言われていす。また、それらの苗が今の姿にまで成長したのは、この大学に属した多くの人がある所に注いだまなざしを受けてであり、現在の木々の姿にはそうした人たちの想いが重なっているということをおぼろげにはいられません。わたしたちは、すばらしい緑を受け継いでいるのです。



ここ数年、大学の緑は転換点にあると思われます。1、2号館の耐震改修工事や図書館と事務棟をつなぐ増設工事などによって、大量の植物が伐採され大きなケヤキやクスノキもいくつか姿を消しました。これからも、大学会館改修、図書館の改修と増築、ライフライン整備など、大きな工事が立て続けに予定されています。これらは大学の将来に向けた機能更新であり、重要な取組であることはいまでもありません。だから仕方のないことだったのですが、通常その後の植栽の回復については工事計画には含まれないものです。なんらかの対応が必要となるでしょう。

わたしたちには、この受け継いだ緑—森をより美しいひとつの景観として発展させ、大学の財産として次の世代に渡していくことが、課せられています。大学の思索の多様性の上に大きく腕をひろげる、明るい森。これまでのように数人の思いを繋ぎ合わせていく

という方法だけでは、残していくことさえ難しい。そこで、大学ではこの緑の環境を次に伝えるため、「京都教育大学植栽計画」策定に現在取り組んでいるところです。この継承したものの重要性をはっきり意識し、力を合わせ、粘り強く取り組まなければ、この風景は失われていくのです。

次の言葉を、ここに引用しておこうと思います。フランスの地理学者で新風土学の提唱者であるオギュスタン・ベルクが、東北地方災禍以降の日本に寄せたメッセージ（『建築雑誌2011.12』日本建築学会）の冒頭です。

「景観十年、風景百年、風土千年」という格言がある。それは、つくるときの話。破壊するときは、計算はどうなるかという、答えはだいぶ簡単になる。いずれの場合も、1日で十分というわけなのだから。



写真は、附属図書館入口のロータリーから、それぞれ北側、西側を望む。(2011年12月撮影)

# 私の名前・物の名前 —幼稚園生活の片づけに着目すると—

附属幼稚園副園長 鍋島 恵美

## 【家庭から幼稚園へ 私の名前のある暮らしの中に】

皆さん、自分の名前に出会うのはいつの頃か記憶に残っておられますか？果たして家庭の中に自分の名前が書かれている場所があるでしょうか？

ところが、幼稚園という集団教育の中に入ったとたん、靴箱・ロッカー・持ち物・衣服等々に名前が書かれてきます。その名前のある場所が自分の物を片づけたりする所となり、人の物との区別がつくのです。私たちの園では、文字（ひらがな）を環境として子どもの生活の中に使用しています。が、発達に応じて3、4歳児には名前とともに個人用に選んだシールを一緒に貼っています。幼児は、名前は読めなくてもシールを覚えて最初は、自分の名前と出会っていきませんが、5歳児になると自分の名前は分かってくるようになります。

## 【いろいろな物の名前のある暮らしの中で】

私の名前とともに、園内環境の遊具や用具にも名前があります。たとえば、「大積み木」「ブランコ」「ままごと」等々です。それらは、誰が使ってもいい物ですが、Aちゃんが使うと「Aちゃんのブランコ」になり、使い手の所有権が派生してきます。そこからもの取り合いが始まります。ままごとの道具もしかりです。

## ■ 3歳児エピソード 物の取り合い

C、D、Eと教師がバケツに砂を入れてカレー作りをしている。Cと一緒に「カレーは、いかがですか？」と、雲梯で遊んでいるFらに持っていくと、Fは「いただきます」と食べるふりをする。そして、一緒にカレー作りを始める。Fが「これ使う」と抜き型を使おうとすると「だめ、これC君が使ってたし だめ」と言って貸さない。……



このように所有権を巡って取り合いが起こってきます。今、使っていないくとも「さっき使ってた」と占有権を主張することもあります。ところが、5歳児になってくると、順番やルールを守るという規範意識が芽生え、みんなのものという公共性も身に付け始めます。しかし、片付けとなると、話が違ってきます。

## 【片づけ —物と遊び手との 別れ がくると—】

ジャングルジムやブランコなどは、片付けになってその場を離ればいいのですが、ままごとや砂場など

の遊びでは、使った物を元通りに片づけなければなりません。それまで、「ぼくの」「わたしの」と所有権や占有権を主張していたのですが……

## ■ 5歳児エピソード あいつらも遊んでたやん……

数名の男児がジャングルジムと、椅子に乗せたバケツの間に樋を渡し、ジャングルジム側から泥水を流し「ジュース屋」をして遊んでいる。バケツのジュースが減るとGが、ジャングルジム側から補充する。他の男児が交代を言うが、無視してそのまま続けるが、気にしているのかバケツにジュースが一杯にもかかわらず流し続けて、ジュースをあふれさせてしまい、ジュース屋としての機能が崩壊。するとGを含む3人が他の所へ行ってしまった。まもなく、片づけのアナウンスが先生からなされ、残った2人は「あいつらも、遊んでたやん」と不満を口にしつつ片付け始める。

このようなことが起こってきます。遊び手が物と別れると片付け手がいなくなるのです。片付けることが、子どもにとっては、やらされることになっていくようです。その一方で、遊びたいけど片付け「仕方ないなあ」と、日々の暮らしの中で、その状況を受け入れていくようになるのです。

## 【物からの呼びかけ —わたしはここよー】

そこで、子どもが、主体的に片付けができるように先生達はいろいろな工夫をしています。物から「わたしはここよ」との誘いかけるかのようにして、見える形で美しく楽しく環境を整えていきます。



## ■ 4歳児エピソード

まだ、ここにもあるよ 片付けよっか

そろそろ片づけの時間というときに、観察者が「まだ、ここにもあるから片づけよか」と促すと、みんな素直に片づけはじめていた。おもちゃの裏にクラス別の色のシールが貼ってあり、それを見てしっかりと分けていた。おもちゃをしまう場所にも、シールが分かりやすく貼ってあってそれに合わせてきちんと整理していた。子どもがしっかりとしていることにも驚いたが、シールをもちいた片づけさせる工夫がとても印象的だった。



## 「教育実践研究発表会」

附属桃山小学校副校長 西井 薫

本校は、パナソニック教育財団の特別研究指定を2年前に受け、研究テーマを「人間力」育成のためのプログラム開発として、全校をあげて取り組んできました。そして、平成24年2月10日に全クラス公開で教育実践研究発表会を行います。その研究発表会について掲載したかったのですが、原稿締めきりに間に合わないため、この研究の経緯について書くことにします。この研究に取り組むきっかけになったのが平成21年「スクールニューディール構想」です。この教育

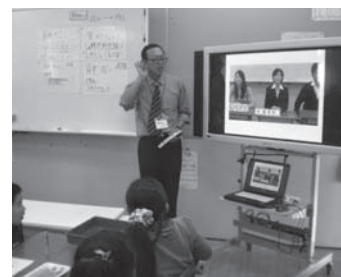


構想で本校の各教室と一部の特別教室に電子黒板が整備されました。かねてよりの念願がかなったことで、この機器を無駄にすることなく研究を進めていくために「人間力」育成という大きなテーマに取り組んできました。「人間力」育成という非常に難しい研究テーマではありましたが、本校がずっと教育理念として継承してきた「創造性教育」こそがこの根底になるとの確信がありました。そこで「創造性教育」について、全教員が共通理解することが重要になってきました。元副校長川端先生を講師として、「創造性教育」を学ぶ研究会を月1回開催し、全教員が授業研究に取り組みました。「創造性教育」を学び直していく中で、「人間力」を「本質に迫っていく力」と捉えていきました。「ひと・もの・こと」の本質を探ることは、その関係性を新たに再構成することであります。再構成するためには、人と人が関わりあいながら、また自己の内面を見つ



め直ししながら、より深く探究していくことが必要になってきます。この「創造性教育」を学ぶための授業の中で、ICTを活用した方が有効で

ある場合は積極的に取り上げていきました。しかし、基本的にはICT機器は道具のひとつであると捉えて、あえて使わないという選択もあるという考えで臨んでいます。このように今まで本校の教育理念であったものが、全教員共通に認識できたことの意義は大きかったです。



そして、電子黒板をはじめとしたICT機器の活用も進んでいきました。毎日のスピーチタイムはもちろんのこと、2年目には健康観察も全て電子黒板を利用することになりました。教員にとっても子どもにとっても、今や電子黒板やICT機器は、日常にあるもので自然に使いこなせるものになってきています。

しかし、最初から今のような状態だったのではなく、中にはパソコンが自由に使いこなせない教員もいました。しかし、この研究指定を受けたことで、全員が積極的に使うように努力を重ねました。高い教育技術を持つ経験豊かな教員と機器操作に堪能な若手の教員が協力して授業を作り上げていく姿が多く見られました。全教職員の努力と協力があったからこそ、この研究を進めることができました。また、この研究を進めていくことができたのは、本学の浅井先生、富永先生、白鷗大学の赤堀先生、そしてパナソニック教育財団の方々のご指導とご協力ご支援があったからこそです。

今後はこの研究を深化発展させていき、文科省の研究指定を受けて、新教科「メディア・コミュニケーション科」に取り組んでいくこととなります。



# 附属桃山中学校職場体験学習 ～ 135名の生徒が40事業所でお世話になりました～

附属桃山中学校副校長 高木 英 男

本校では、社会体験活動を通して自己理解を深め、社会との相互関係の中で、自分らしい生き方を展望し実現していくことをめざした職場体験学習をおこなっています。この体験学習では、生徒一人一人が自らの希望に基づいて広く社会（地域）に出向き、様々な社会体験を通して勤労観・職業観などを学習します。また、体験活動や人と人とのふれあいを通して、自己を見つめ、自らの生き方を考え、将来を切りひらいていく力をつけるなど、いわゆる「生きる力」を身につけることをねらいにしています。



今年度は、2年生135名の生徒が40事業所にわかれて体験学習をおこないました。「任された喜び、認められた喜びが、自信になりました」「ありがとうといわれる言葉に、職場にも役立つ自分を見つけました」「作業をとおして、自分のもつねばり強さに気づきました」「私の職場体験学習の話に、家族のみんなが笑顔で聞き入っていました」など、生徒たちは、教室の授業では学ぶことのできない「人として学ぶこと」や、社会の一員として生活することの大切さ、働くことの大変さや充実感を体感し学習しました。



体験学習後に各事業所へ送りました生徒の礼状文から、一部を抜粋し紹介します。

京都市立〇〇幼稚園様

・・・・・・・・・・略

職場体験学習では、子どもたちと遊んだりプールに入ったりすること以外に、子どもたちが帰ってから、七夕かざりの材料作りやいちご・コスモスの植えかえ、また子どもたちの前での発表など様々なことを体験させていただき、とても充実した3日間をおくらせていただきました。また、今まで知らなかった子どもたちが帰ってからのお仕事についても知ることができ、大変勉強になりました。小さい子どもたちと接することは思っていたよりも気がつかうことが多く大変でしたが、子どもたちに笑顔で話しかけてもらったり「ありがとう」と言ってもらったときなどに得られる喜びを強く感じる事ができ嬉しく思っています。・・・・・・・・・・以下省略



大型スーパー〇〇店様

・・・・・・・・・・略

体験学習では、開店時のあいさつ、商品の品出し、ごみ出しなどのお仕事をさせていただき、たくさん学ぶことができました。中でも特に、私たちがお客様に商品の場所を尋ねられて困っていた時、従業員の方が素早く適切に対応されている姿を見て、とても感心しました。また、お店の中で安全な作業をすること、お客様とのコミュニケーションをすることの難しさを感じることができました。このような体験をさせていただいたことを心から感謝しています。時間内に商品の品出しを終えることができず、従業員の方にお手数をおかけし、申し訳ありませんでした。私たちのために、このような貴重な職場体験学習の場を提供していただき、本当にありがとうございました。・・・・・・・・以下省略



また、保護者の方からも次のようなお声をいただいています。

昔とくらべて、身のまわりの小売店や近所づきあいの減少により、子どもは家族・先生以外の大人とおしゃべりすることがとても少なくなり、大人社会との距離は、遠くなっているんじゃないでしょうか？



情報があふれる中、知っていることは多くなっても、精神的になかなか大人になれていないようにも思えます。職場体験で仕事の大事さ大変さや社会のことが少しでもわかることで、人に対する思いやりや、時間・お金の大切さ等、いろいろなものを感じてもらえればと思います。（体験学習の事前にも仕事の厳しさやあいさつの大事さ等、授業とは違うので迷惑をかけないように話し合いました。）

生徒たちは、今回の職場体験学習を人と人とのふれあいを通して、将来を切りひらいていくための「生きる力」を身につける機会としました。今後は、この体験学習の学びを、さらなる夢に向かって羽ばたく礎にしてくれることを願っています。

本校としましては、勤労観・職業観を育てるためのこの職場体験学習を、今後も総合的な学習の時間「生き方」における大切な学習と位置づけていきます。今後とも本校の職場体験学習にご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 大学院連合教職実践研究科教授 竺 沙 知 章

1986年3月に京都教育大学教育学科を卒業し、昨年4月に兵庫教育大学から異動してまいりました。四半世紀ぶりに母校に戻ってまいりました。兵庫教育大学は、1978年に設立された新構想の教育大学で、主として現職教員が学ぶ大学院中心の大学です。学部生に対する教員養成の教育と合わせて、長く教師教育に携わってまいりました。本学でも教職大学院という新しい教師教育のための大学院に所属しています。教職大学院は、より高度な専門性を備えた教員を養成することを目的とし、学部新卒院生と現職教員院生が学ぶ大学院で、教員の資質向上に貢献する使命を負っています。そうした使命を果たす上で、昨年の大震災は、きわめて重い課題を我々に投げかけています。今

の日本の状況を考える時、子どもたちに何を伝えればよいのか、どのような力を身につけさせればよいのか。とりわけ原発事故は、我々に重い課題を突き付けています。必要な情報を入手し、必要な知識を身につけ、将来を見据えた適切な判断を行うことが求められています。歴史の検証も必要でしょう。そのような時代に生きる子どもたちを育てるためには、教員には、教える技術を磨くだけでなく、視野を広げ、見識を深めることがいっそう求められます。そのような教員が育つ場に教職大学院はならなければなりません。これから教員を目指す若い院生、そして現職教員の院生とともに、私自身も学んでいきたいと思っています。

## 大学院連合教職実践研究科教授 小 松 茂

今年度から実務家教員としてスタッフに加えていただきました。これまで公立学校の教員と管理職、研究職、在外教育施設の校長など実に様々な経験をしてきました。

私の所属する教職大学院は、教育を研究対象とするのではなく、教員としての実践的な指導力を育成する場と位置づけられていますので、これからは教育現場に人材育成という形でお返しができるかと考えています。実践なき理論は空論になりがちですし、理論なき実践は普遍性を欠いた経験主義に陥りがちです。理論と実践の融合を図りながら、大量退職によって世代交代が一挙に進行している学校現場に、覚めた頭脳と熱い情熱をもった「人間教師」を一人でも多く送り込むために努力して参ります。

研究・専門分野は、教員の養成・採用・研修の在り方と生徒指導です。どうぞよろしくをお願いします。



マレーシアの村（カンボン）にて

昨年4月に着任いたしました竹花裕子です。どうぞ、よろしく願いいたします。本学卒業後、京都府下の小学校教員として20年余り勤務して参りました。市町教委に派遣され社会教育行政に携わった経験も3年程ございます。特に、課題が大きいとされる小学校での勤務が長く、学校で起こる数々の課題解決に向け、地域の方々や行政の関係機関と連携を図り、奔走したことを思い出します。学校という存在は、地域にいかん支えられているかを感じずにはおれない、これまでの教職人生であり、助けていただいた皆さんとのつながりは宝物です。

その経験を経て今改めて感じるのは、教員に求められる「コミュニケーション力」の大切さです。ご存知のとおり、学校現場は「人」を介して全ての業務が成立していると言っても過言ではなく、目と目をしっかりと合わせ、温かな会話と思いやりある人間関係を築

くことができる人材が求められています。

赴任後、今の学生の実態に触れ、「コミュニケーション力」育成にぜひ尽力したい思いです。学生間で直接言葉を交わす機会を増やし、助け合い協力しながら共に成長し、その中で自分を堂々と表現できる力を育もうと、微力ながら授業でも心がけています。

教員に求められる資質は、授業力だけでなく、子どもたちと関わる力、保護者と関わる力、地域と関わる力、チームの一員として仕事ができる力であり、課題の大きな子どもや家庭にこそ温かな思いやりをもって関わっていくことができる力であると確信します。

それらの中で営まれる教員という仕事は、たいへんであることは拭えませんが、それ以上にやりがいある素晴らしいものだということを、一人でも多くの学生に伝えていきたいと思っています。

## 「人間先生」

福山市立千年中学校 教諭 内田 祐衣  
(音楽教育専攻 平成19年度卒業生)

京都教育大学に入学が決まり、「めざす教師像」というレポートに、私は「人間先生になること」と書きました。「先生」である以前に、一人の人として人間らしく感性豊かにいたい、という思いから書いたものです。

大学では、音楽と教職について有意義に学びました。あらゆることに興味がわき、先生方の個性の中でとても楽しい時間を過ごしました。また、表現することへの憧れから演劇を始め、感性をぐらぐらと揺さぶられる多くの出会いがありました。

「先生」というのは、子どもたちの前に、いつもその人となり映っているような仕事だと思います。大好きなピアノの演奏に聴き入ってくれること、「歌舞伎おもしろ〜!」「ベートーヴェンってすごい!」と反応があること。培った力は素直に生徒に届くという嬉しい証拠だと思います。反面、思い立ったら前後を忘れて即行動するという私の弱点は、クラス経営にも痛

くひびきます。クラスが落ち着かず、「討論・話し合い」をするも、まさに形骸化。付け焼刃的に手段を探ただけに過ぎず、3年間を見通したビジョンの甘さを痛感させられました。また、極端に言えば、生徒との関係づくりに難しさを感じたときも、「同じようなことで友だちともめたなあ」と気付くこともあるくらいです。クラス担任、部活動顧問、4年間の経験を積んできましたが、壁にぶつかるときも、子どもたちとつながるときも、その因果には一人の人としての自分自身が常に大きく関わってきました。

私自身がまだずいぶんと子どもで、「人間先生」としての課題は大きいですが、自分が出会う子どもたちが、「大人って素敵だな。」と思えるような人でありたいと思います。そのために、たくさんのことを経験し、出会う人、学べることを大切にしたいと考えています。

## 子どもたちの明日のために

京丹後市立網野南小学校 教諭 山形 志織  
(数学領域専攻 平成22年度卒業生)

京都教育大学を卒業してもうすぐ一年がたとうとしている。京都教育大学で、教育実習やインターン、ボランティア等を行っていたこともあり、「何とかなるだろう」と思っていたのもつかの間。四月当初、入学してきた子どもたちを目の前にして、「とまどい」という言葉がぴったりなほど何をして良いかわからなかった。しかし、たくさんの先生方から学び、子どもたちと一緒に成長する中で、目の前の子どもたちのために、今何が必要なのかということを考えることができるようになった。

大学のことを考えるとき一番に思い出すのは、教育実習でうまくいかなかったことと、たくさん調べ、学んだ卒論である。教育実習が消化不良で終わったとき、私は「教員になるのをやめよう」と考えていた

が、その後インターンやボランティアを通して学び、「教員になろう」と決めたのである。このように考える期間と機会を充分に与えてくださった京教のシステムは本当にありがたかった。「活用」について考えた卒業論文での学びは今に生きている。一年前はわからなかったけれど、あの時しっかり基礎基本を身につけたからこそ現在の教材研究がスムーズにできるのだと思う。今、これが「活用」することなのだ実感している。

私がそうであったようにやはり「基礎基本の定着」は粘り強く何度も繰り返すことしかないのだろう。子どもたちの明日の「活用」のために、今私にできることは「いかにしてより効率よくより効果的に基礎基本を身につけさせるのか」を考えることだと感じている。

## 「夢・ファイト・誠意」のすすめ

京都教育大学同窓会事務局員 谷口博志

私は、昭和46年に京都教育大学技術・職業学科に入学しました。家業が建築機械・道具の店であったこともあり小規模ながら産業分野の工業・農業・商業からコースを選べる本学科に入学しました。専攻は農業を選び、作物の育成やスクールガーデンのことなどを学びましたが、4年間を通じてあまり専門を深めることはできませんでした。専門の他に小学校免許も取っていて、3回生の6月～7月に附属桃山小学校と中学校で教育実習がありました。初めて附属小学校の授業を見た時、教えるというイメージの授業ではなく、子ども自らが動く授業に大変驚きました。研究協議では、附属の先生方は大変研究をしておられることに感心させられ、教師の仕事のすばらしさを実感しました。この経験から教員への志望が確かになり、京都市の教員採用試験に受験して昭和50年に卒業と同時に京都市に採用となり、伏見住吉小学校に着任しました。

初年度から4年生の学級担任を任せられ、学級づくりと日々の授業に力一杯取り組み、あらゆることが学びの毎日となりました。目標としていた子ども主体の授業作りも実際には大変難しく、教材研究が不足していると教える授業に陥ってしまいます。数年が経ち、私は体育主任を任せられるようになりました。体育には、体育系などの言葉に象徴されるように、先輩後輩の関係や強い者が勝ちといったイメージがあるように思います。しかし、そのことに何か納得できないものを感じていた時、体育の校内授業研究会があり、指導主事の先生が「体育では、子どもひとりひとりが運動（スポーツ）に親しみ、運動（スポーツ）の楽しさを味わうことが大切である。まずは下手の横好きでよい。」と話され、教育実習に続いて大きな衝撃を受けました。「なるほど、これが体育の本質ではないか」と共感したのです。その後、体育研究会に入り、体育研究の活動を続けていきました。一方、各歴任校では校内研究の取組があり、多くの先生方から貴重な指導をいただき、社会科を中心に授業研究を深めていくことができました。体育の研究と歴任校での授業研究を通して得た考えや指導力、また多くの方々との出会いは、教員としての自分へのかけがえのない財産となりました。昭和62年から8年間附属京都小学校で勤務し、

平成7年に再び京都市に戻り、平成9年から教頭職に昇進して翔鸞小学校に着任しました。教頭では、これまでの経験を生かして授業を大切にしたいと取り組んでいきたいと考えていましたが、十分な力が無く、平成23年3月に宕陰小・中学校の教頭として定年退職しました。4月からは、京大大同窓会事務局と周山中学校の非常勤講師の勤務に就き、現在に至っています。35年間の教員生活を振り返って、十分な成果が上げられたかと言えば、必ずしも十分ではありませんでしたが、何事に対しても常に積極性を心がけてきました。

さて、定年退職を迎え、人生の大きな山は過ぎたと思います。これから始まる人生は、第2の人生（プラスアルファの人生）になるでしょう。しかし、私は、ここでも積極性を忘れないでいたいと思っています。私が学生であった頃、森村桂さんの「Lサイズで行こう」を読んで、「夢をもち、ファイトを燃やそう。そして誠実に努力すれば道は開ける」に大変共感しました。壁にぶつかった時など、何度も勇気づけられた記憶があります。私の場合、これまでの生活で夢・目標が達成できたこともあれば、できなかったこともあります。しかし、できなかったことは、自分に何か足りなかっただけで、基本的には「なせば成るなさねばならぬ何事も」は正しいと思っています。世の中には、ハンデキャップをもちながら、様々な分野で大きな成果をおさめられている方が大勢おられます。素晴らしいことです。そのような偉業は、極めて希ではありますが、あらゆることに可能性があるという点が大切だと思います。そのような偉業とはかけ離れた私の最近の出来事を紹介します。退職後始めたダイエット目的のウォーキングが次第にランニングに発展し、半年ほどの間に各地のマラソン大会に出場するようになりました。60歳からこのようなことができるとは想像もつきませんでした。やればできるものだと思っています。些細な例ですが、やはりどんなことにも可能性があるという思いです。これから教員になろうと思っておられる方、既に教職に就いておられる方、また教員に限らずどの分野に進まれておられる方においても、「夢・ファイト・誠意」を持ち、大いに自己実現を果たして欲しいと思います。



## 第 129 号の読者の皆さまへ

京都教育大学広報誌「KYOKYO」をお読みいただきありがとうございました。  
より良い広報誌を作成するため、皆さんからのご意見・ご要望をお待ちしております。  
広報誌のご感想や今後取り上げてほしいこと、質問したいことなど何でも結構ですので、下記までお寄せください。

〒 612-8522  
京都市伏見区深草藤森町 1 番地  
京都教育大学企画広報課気付「地域連携・広報委員会」  
E-mail : kouhou@kyokyo-u.ac.jp

## 129 号編集後記

広報紙「KYOKYO」第 129 号をお届けいたします。本号の特集は『京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアム』です。

平成 23 年 11 月 12 日、まなびの森ミュージアムが開館しました。

平成 23 年 8 月に教育資料館が発足し、資料を整理して学術研究や学校教育、社会教育に役立てることであり、その資料を公開するためにつくられたのが、「まなびの森ミュージアム」です。今号では、ミュージアムの開館までの経緯と、施設について紹介します。

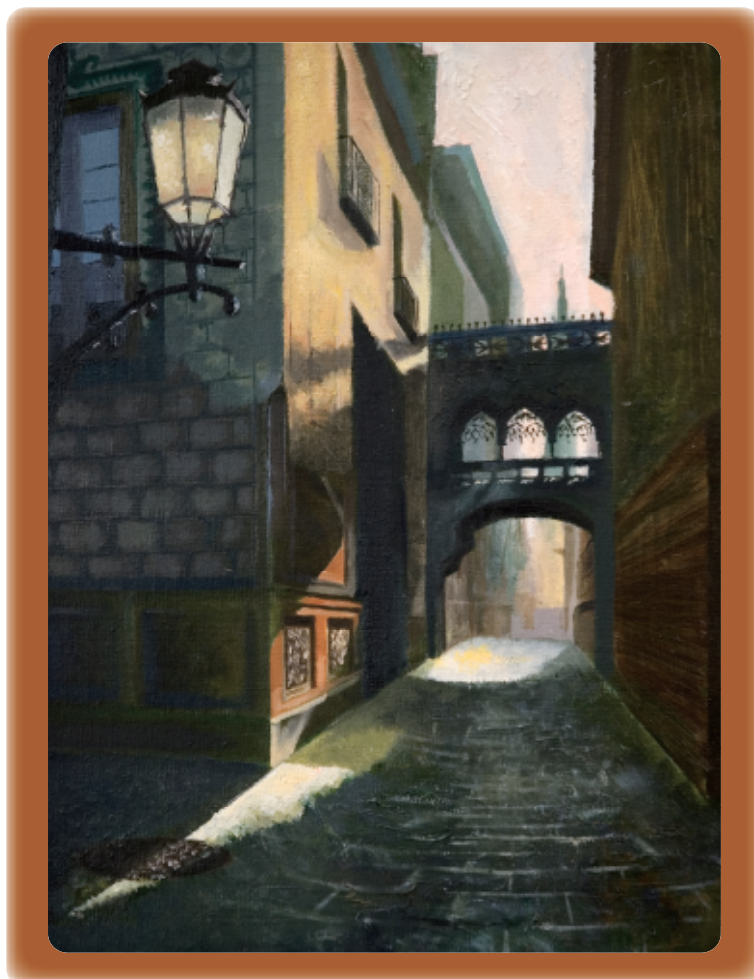
なお、今号の表紙を飾るのは附属高等学校の岡口美沙さんの作品、裏表紙は同じく高等学校の宮原ななせさんの作品です。二人それぞれの思い出があるシーンの油絵を楽しみください。

地域連携・広報委員会委員長 細川 友秀



### 地域連携・広報委員会

委員長	細川 友秀				
副委員長	相澤 雅文				
委員	齋藤 正治	吉江 崇	丹下 裕史	浅井 和行	
	荻野 雄	奥村 真紀	奥野久美子	富家 健治	
事務担当	企画広報課				



京都教育大学広報 第129号

発行日  
2012年3月16日

編集  
地域連携・広報委員会

発行  
京都教育大学  
〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1  
電話 075-644-8125  
<http://www.kyokyo-u.ac.jp/>